

思い出の町

大武千恵

* 登場人物

神島なるみ(25) 旅行会社OL
矢野良太(25) なるみの元クラスメイト
水谷彩(25) なるみの友人
矢野里子(53) 涼太の母
上司(男)

SE 都会のざわめき

なるみN「以前こんなテレビドラマを見たことがある。都会に疲れた主人公が田舎に帰り、友人や家族、ふるさとの自然に癒され元気を取り戻す……というものだ。あの頃は真剣にみていたけど、現実はそのなにごとに甘くないんじゃないかと思う」

SE 会社内、パソコンを打つ音

なるみN「すべての人が、優しく受け入れてくれるふるさとを持っているわけじゃない。励ましてくれる友人や家族だってないかもしれない。だから……疲れ果てた主人公を見ても、ずいぶん恵まれている、なんておもってしまうのだ」

SE 鳴り続ける電話

上司「神島さん、頼んでた書類まだできないの？午後から会議だっていったよね？」
なるみ「すみません。ちよつと計算が合わなくて……。午前中には必ず仕上げます」
上司「もう三年目でしょう？しつかりしてよ。他の同期はちゃんとできてるよ」
なるみ「すみません……」

なるみN「高校卒業後、私が札幌にできてきてもう七年がたつ。私の生まれ育ったふる

さとは、北別市という道内でもちいさな町だ。昔は炭鉱で栄えていたというけれど、今ではすっかりさびれてしまっている。商店街もシャッターを閉めている店の方が多い。……ただ、親が再婚したこともあって、ふるさとはほとんど帰っていない」

上司「神島さん、悪いんだけど、来週の土曜日出勤してもらえないかな？大事な取引先との会議があるの。知ってるよね？お茶だしする人他にいらなくて」

なるみ「すみません、その日は高校の同窓会があつて、休暇をいただいているんです。ふるさとに帰るのもほんと数年ぶりです」

上司「あ、そう。忙しいのに里帰りか。いいんじゃない？ま、私だったら仕事を優先するけどね」

なるみ「すみません……」

なるみN「正直、ふるさとがすごく懐かしいとか、同窓会に思い入れがあるわけじゃない。ただ……つらい日常から離れたかったのだ。都会からふるさとに帰るあのテレビドラマの主人公になりたかった」

SE 鈍行列車の走る音

なるみN「こうして私は、列車を乗り継ぎ、札幌から故郷である北別市に向かった」

SE 列車到着のアナウンス

彩「おかえり、なるみ」

なるみN「駅のホームで待っていたのは、数少ない高校時代の友人、彩だった」

なるみ「元氣そうだね。わざわざ迎えに来なくてもよかったのに。仕事大丈夫なの？」

彩「うん、今日は休み。なるみが同窓会に出席するって初めてでしよう？だからうれしくて」

なるみN「地元の病院で看護婦をしている彩は屈託なく笑う。彼女は誰にでも優しい女の子だった」

彩「どう？久しぶりのふるさととは？」

なるみ「なんか、前より寂しくなってる気がする」

彩「なるみ、今も札幌でしょう？楽しい？」

なるみ「楽しいっていうか……。仕事ばかりだよ。けっこう大変」

彩「でも、いいなあ。私も札幌の病院で働きたかった。奨学金もらってるから、地元に戻ってきたけど」

なるみ「でも、もう四年目でしょう？奨学金の分は働いたんじゃないの？」

彩「そうだけど、親も病気がちだし、いまさらそんな勇氣もないし……。なるみがうらやましいよ」

なるみ「私は大学が札幌だったから、そのまま就職しただけで……」

彩「なんかさ、このままでいいのかわかって、思うんだよね。昔は夢とかあったけど……もう無理だもん」

なるみ「なにいつてるの。うちらまだ二十五歳じゃない。仕事、大変なの？」

彩「あ、ううん。ね、これからどうする？同窓会夜でしょう？一回家に帰る？」

なるみ「うん……その前にサル山に行きたいな」

彩「サル山？あんなとこいきたいの？」

なるみN「この町の丘の上には、通称サル山とよばれる小さな動物園がある。子ども頃よく遠足で行った場所だ。特別思い出深い場所じゃないけど、あの丘から見る町の風景が好きだった」

なるみ「ダメかな？」

彩「いいよ。サル山なんて、小学校の遠足以来だね。じゃ、そのコンビニによってお茶でも買おう」

なるみ「あ、待って」

彩「何？」

なるみ「どうせなら、あそこにしない？」

なるみN「私は、百メートルほど先にある、古びたスーパーを指差した」

彩「ふるさと活性化のため？」

なるみ「うん」

彩「いいんじゃない？なるみらしい」

SE 携帯の呼び出し音

なるみ「私の……じゃないし、彩だよな？」

SE 鳴り続ける呼び出し音

なるみ「いいよ、話しても。でないの？」

SE 携帯のボタンを押す音。

着信音が止まる。

彩「ごめんね。大丈夫だから」

なるみ「切っちゃっていいの？用事があるからかかってきたんじゃないの？」

彩「ううん、いいの。早く行こう」

なるみN「なんとなく、さみしげな彩の様子が気になった。でも、彩はそれ以上しゃべるわけでもなく、私たちは無言のまま歩き続けた」

SE スーパーの店内。小さく音楽が流れている。

なるみN「スーパーの店内は思ったとおり、ガラガラだった」

なるみ「平日なのに、あまり人いないね」

彩「ほら、隣町に大型スーパーができたじゃない？だから、あそこに行く人が多くて、ウーロン茶でいい？」

なるみ「うん。……あれ、矢野くん？」

なるみN「お年寄りが目立つ店内で、ひときわ長身の男性がいた。高校時代の同級生、矢野くんだった」

矢野「よお、久しぶり。帰ってきたのか？」

なるみ「うん、同窓会だからね。矢野くんもでるんでしょう？今、札幌だっけ？」

矢野「ああ。でも、おれ、今日は出席しないから」

なるみ「なんで？せっかく帰ってきたのに」

矢野「帰ってきたのは、別の用事だし。それより、彩。お前、こんなところで何してるんだよ」

彩「……」

なるみN「後ろを見ると、彩が私のかげに隠れていた」

なるみ「彩？どうしたの？」

矢野「おまえ、あいつにちゃんと連絡したのかよ？何回電話してもつながらないって

心配してたぞ」

彩「別に……関係ないし」

矢野「関係ないわけないだろ。あいつがどれだけ心配してると思ってるんだ」

彩「別に迷惑かけるつもりないし。行こう、なるみ」

なるみ「えっ、ちよっと話が見えない」

矢野「あいつ、お前のこと必死で探してるぞ」

彩「……バカみたい」

矢野「妊娠したかもっていわれて、ほっとく男がどこにいるよ？」

なるみ「えっ？妊娠！」

彩「……とりあえず、外に出ない？」

なるみN「そそくさと買い物を買わせると、

私たち三人はサル山にきた」

SE 車のエンジンが止り、ドアが開く音。

矢野「なんで話するのにサル山なんだよ」

彩「なるみのリクエスト。久々の里帰りで行きたい場所がここなんだって」

なるみ「私のことはいいから」

彩「ま、ここなら人も少ないしね」

SE 遠くで猿や鳥の鳴き声がかきこえる。

なるみN「土曜日の昼間だったが、サル山に

は私たち三人のほか、家族連れがちらほ

らとしかみえなかった」

なるみ「さっきの話なんだけど……あの、妊娠って」

矢野「同級生で、相原っていただろ？」

なるみ「ああ、たしか野球部だったよね。今、何してるか知らないけど」

矢野「この市役所で働いてる」

なるみ「へえ、地元に戻ってきたんだ。……で？」

矢野「おまえ、気づけよ。彩の彼女だよ」

なるみ「そうなの？付き合ってたんだ！いつから？もう、結婚したなんてきいてないし」

彩「結婚はまだ」

なるみ「え、だって、妊娠……って、あ、そっか。いや、ごめん！そうだよ。いま

どき、珍しいことじゃないし！うん、おめでとー！」

矢野「お前がパニクってどうすんだ」

彩「なるみ、オクテだから」

なるみ「私のことはいいから！結婚するんでしよう？いまどき、できちゃった婚で騒

ぐ人いないよ」

彩「わからない」

なるみ「わからないって……まさか、結婚する気ないの？相原くんは？」

矢野「あいつは、結婚したいっていつてる」

なるみ「じゃあ、問題ないじゃない？」

彩「私がどうしたらいいかわからないの」

なるみ「彩……」

彩「相原くんのごときは好きだけど、突然妊娠

がわかって、結婚なんていわれても……仕事だって半人前なのに、母親になる自信なんてないもの」

矢野「あいつは彩のこと真剣に考えてるよ。

結婚して、子どもを産んだって仕事はできるだろ」

彩「でも……」

なるみ「彩……そんなにこの町が嫌い？」

彩「えっ」

なるみ「結婚がいやなんじゃなくて、この町にしばらく住むのがいやなんでしょう？そんなに札幌がいい？」

彩「札幌にいるなるみや矢野くんにはわからないよ。相原くんは、この町から出るつもりないっていうし。私だって、どうしたらいいかわからない」

矢野「彩……」

なるみN「札幌だって、そんなに住みやすいわけじゃない。だけど、今それをいって

も、彩を傷つけるだけだと思った」

矢野「勝手だけど……おれは彩がこの町にいてくれてうれしいけどな。たしかに札幌

もいいかもしれないけど」

なるみ「そうだよ。私も、彩におかえりっていつてもらえてうれしかった。なんか安心する」

彩「……それじゃあ、単なるお母さんじゃな

い

なるみ「でも、安心するんだ。彩でよかったって」

矢野「おれも。彩の顔を見ると元気が出る」

彩「そんなこといわれても。札幌に行きたい気持ちには変わらないよ」

なるみ「うん、それは否定しない」

彩「ずるいよ……。そんな言い方されたら、何もいえないじゃない。ただのわがままだっと思ってるんじゃない？」

なるみ「そんなことないよ。彩の気持ちもわかるし」

矢野「あいつと……。ちゃんと話せよ。話さないことには、始まらないだろ？」

なるみ「そうだよ。相原くんのは好きなんでしよう？」

彩「……電話するよ。ちゃんと今の気持ち話してみる」

なるみN「彩が電話して10分後、すぐに相原くんが車でやってきた。何度も私たち

にお札をいう彼を見て、きつと大丈夫だと思つた。彩は、少し涙ぐみながら、相原くんとともに帰って行った」

矢野「彩のやつ、ちゃんと話せるかな」

なるみ「でも、大丈夫。そんな気がする」

矢野「そうだな」

SE 遠くでサルの鳴き声

なるみ「それにしてもサル山久しぶり」

矢野「ああ。おまえも元気そうだな。今、札幌だろ？何してるの？」

なるみ「私は旅行会社の事務。矢野くんは？」

矢野「車の営業。仕事なれたか？」

なるみ「私は三年目だけど、怒られてばかり。覚えが悪くて」

矢野「お互い大変だな」

なるみ「うん」

SE 遠くで子どものはしゃぐ声

なるみ「今日の同窓会出ればいいのに」

矢野「おふくろ、今、入院しててさ。それで、おれ、週末だけ帰ってきてるんだ。うち、父親いないし」

なるみ「そう……。早くよくなるといいね」

矢野「多分、無理だろ。すい臓ガンの末期だから」

なるみ「……」

矢野「もつて、あと一ヶ月っていわれてる。痛みも強くて、痛み止めの麻薬もつかつてるんだ」

なるみ「ごめんさい、私何も知らなくて……」

矢野「今は、どうにか会話もできるけど、この先、昏睡状態になるだろうって」

なるみ「……」

矢野「ごめんな。久しぶりに会ったのにこんな話して」

なるみ「ううん。ね、早くお母さんのそばに行つてあげて」

矢野「これからなんか予定ある？」

なるみ「ううん。夜の同窓会までは何も」

矢野「ひとつ、頼みごとがあるんだけど」

なるみ「なに？」

矢野「恋人のふりをしてくれないか」

なるみ「え？な、なに？」

矢野「おれの結婚相手をみたいっていうのが、おふくろの夢でさ。早く恋人を連れてこ

いってうるさいんだ」

なるみ「だ、だつて、矢野くん付き合つてる人いないの？」

矢野「いたら頼まないよ。おふくろの意識がはっきりしてるうちに、なんとかしたいんだ」

なるみ「で、でも、私、矢野くんとは七年ぶりに会つたばかりだし、結婚なんてとて

も……」

矢野「だから、恋人のふりだつて」

なるみ「あ、そう、そうね」

矢野「おまえ、あいかわらず、そそっかしいつていうか、おもしろいよな。高校時代から変わつてない」

なるみ「私、嘘つくのつて苦手だし……。すぐ顔に出ちゃうかもしれないよ」

矢野「嘘つていうより、その場だけ演じてくれればいいんだ。大丈夫だよ、元演劇部。

主役やったこともあるだろ？」

なるみ「それは昔の話だよ！本当に私でいいの？」

矢野「こんな頼み、重すぎるのは十分わかってる。だけど、おまえにしか頼めないんだ。礼はするから」

なるみ「お礼なんていらないけど……。がんばってみる」

矢野「サンキュ」

SE 病院内のざわめき。院内放送などが聞こえる。

なるみ「緊張するなあ」

矢野「職場の同僚ってことでいいから。あとは、適当でいいよ。おふくろもそんなに長い間話せないと思うし」

なるみ「うん……」

なるみN「久しぶりに訪れた市立病院は、思ったよりきれいで広々している。矢野くんのお母さんは、内科病棟の個室に入院していた」

SE ノックする音

矢野「おふくろ、入るよ」

里子「ああ、良太」

なるみN「矢野くんのお母さんは多少顔色は

悪いものの、思ったより元気そうだった。

この人が、余命一ヶ月……。じきに、話もできなくなると思うと、胸が痛んだ」

矢野「今日は彼女を連れてきたんだ。おふくろ会いたがってただろ」

なるみ「初めまして。神島なるみです。良太さんとは、同じ職場でお付き合いさせていただいています」

里子「まあ、あなたが。なるみさん、良太がいつもお世話になってます」

矢野「来年には籍を入れて、式をあげたいと思ってるんだ。だから、おふくろも早くよくなってくれよ」

なるみ「そうですよ。お母様にはぜひ出席していただかないと。いつも良太さんと話してるんです」

里子「それじゃあ、早く退院しなきゃね。楽しみだわ」

矢野「……おれ、なんか飲み物買ってくるわ。お茶でいい？」

なるみ「あ、うん。ありがとう」

なるみN「矢野くんが部屋から出て行って、私はお母さんとふたりきりになった」

里子「ごめんなさいね、こんな姿で」

なるみ「いいえ。私のほうこそご挨拶が遅くなってる」

里子「なるみさん」

里子「良太のことよろしくお願ひしますね」

なるみ「まかせてください！……あ、いえ、こちらこそよろしく……お願ひします」

里子「（笑いながら）良太のお嫁さんがあなたでよかったわ」

なるみ「あ、ありがとうございます」

なるみN「その後、私たちはお茶を買ってきた矢野くんと二人で話をした。お母さんの体を気遣ってほんの短い時間だったけれど、お母さんは何度も笑ってくれた」

矢野「じゃあ、おふくろまたくるから」

里子「なるみさん、今日はどうもありがとうとう」

なるみ「こちらこそ、突然すみませんでした。ゆっくり休んでくださいね」

なるみN「矢野くんと私は、そのまま無言で玄關を出た。その瞬間、体の力が抜け、涙があふれてきた」

なるみ「大丈夫だったかな……？私、ちゃんとできてた？」

矢野「ああ。おふくろのあんな安心した顔、久しぶりに見た。……ありがとな」

なるみN「矢野くんの言葉を聞くと同時に、私は思い切り泣き出していた。最後まで演じられた安心感か、それとも、嘘をつ

いた罪悪感なのか、または余命一ヶ月のお母さんに対する同情なのか。理由は自分でもわからない。ただ、泣くばかりの私に、矢野くんは無言で付き添ってくれた」

SE バーンと、花火の打ちあがる音。

なるみ「きれい……」

矢野「本当に良かったのか？同窓会いかなくて」

なるみ「こんな泣き腫らした目でいけないよ。みんなひいちやうって」

矢野「まあ、おれのせいなんだけどさ……」

SE 再び、花火の上がる音

矢野「お礼……ってこんなもんでよかったのか？公園で花火なんていつでもできるだろう」

なるみ「仕事してたら、そうそうできないよ。こないだドラマ見てたら、友達同士が花火をするシーンがあったのね。それ見て、いいなあ、私もやりたいなああって思ったの。だから実現できてうれしい」

矢野「友達っていつてもふたりだけだな。次は、どれにする？」

なるみ「この手持ちのやつ」

SE パチパチとなる手持ち花火

なるみ「こんな一日もあるんだね」

矢野「うん？」

なるみ「本当はこの町に帰ってくるのも同窓会も気が進まなかったの。思い出にひたるっていうのがどうも苦手で」

矢野「じゃあ、なんで」

なるみ「仕事……うまくいってなくて。どこでもいいから、違う場所に行きたかったの。同窓会ならちようどいいやつて。それだけの理由。笑っちゃうでしょ？」

矢野「笑わないよ」

なるみ「ふるさとに癒されたいとか、そんな気持ちもなかった。ここはさびれていく一方だしね」

矢野「おれも、おふくろが入院してなきやめつたに帰らないかもしれないな」

なるみ「でも、今日帰ってきてよかった」

矢野「そうか？」

なるみ「みんながんばって生きてるんだな……って、少しわかったから。きつとき、つらい時期も思い出に変わるんだよね」

矢野「ああ、そうだな」

なるみN「こうしてふたりで花火をしている今も、思い出に変わっていくのだろう。きつと、それでいいんだ」

なるみ「明日、札幌に帰る」

矢野「おれも。こっちにこれるのは週末だけだしな」

なるみN「それだけいうと、ふたりで花火に専念した。あえて、仕事の話も高校時代の話もしない。ただただ、はじけ飛ぶ光に目を奪われていた」

SE 続く花火の音

なるみN「やつぱり現実とテレビドラマは違う。ふるさとが傷を癒してくれるとはかぎらない」

SE 続く花火の音

なるみN「でも、今これだけはいえる。……私は、このキラキラした時間を絶対に忘れない」

SE 鈍行列車の音

なるみN「矢野くんのお母さんが亡くなったのは、それから二週間後のことだった。そして……私は、今も札幌で働いている」

完